

浄土

monthly
JŌDO

May 2000

土

5



法然上人鑽仰会

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは  **0088-82** (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

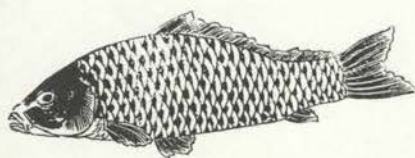
(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

浄土

2000/5月号 目次

キリシタンから見た仏教	菅原伸郎	2
寺院紀行 小松川 寿光院	真山剛	10
懐かしき玩具「達磨落とし」	芝崎慶三	19
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	20
響流十方	林田康順	26
列伝 石井教道	大橋俊雄	30
つぼ庭日記	近藤亜々砂	34
書評の頁		38
コラム 浄土宗と浄土真宗		40
Jフォーラム		41
浄土誌上旬会・特選作品展	選者＝増田河郎子	42
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	47
編集後記		48



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下
表紙撮影＝芝崎慶三
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

キリシタン
から見た
仏教

菅原伸郎

フランシスコ・ザビエルの来日四百五十年にちなんで、昨年夏から朝日新聞東京本社版にある「こころのページ」で連載「キリシタンの時代——宗教論争を読む」を二十八回にわたって書いた。

当時の記録を現代の目で読み直してみたのだが、その論争は決していい加減なものではなかった。今日の宗教間対話で取り上げられているテーマは、すでに当時も議論されていたのだ。共通点を探さないで相手の弱点を探すことに傾きがちではあったが、実はかなりの水準だった。その中から、いくつかの話題を紹介してみたい。

靈魂の有無をめぐる

一五四九年に鹿児島に着いたザビエルは初め、曹洞宗福昌寺の住職忍室と議論した。靈魂不滅説の立場から論争をしかけるが、和尚は「ない」と答えたかと思えば、「ある」とも応じる。無定見とも受け取られたが、忍室はまさに禅問答をしたのであり、釈尊の「無記」に徹していたのだ。西欧の伝統にない否定論法であり、ザビエルが戸惑ったのも無理はなかった。

『日本史』（中央公論社）を書いたルイス・フロイス神父も一五六九年五月、京都の妙覚寺に滞在していた織田信長の前で日乗と議論している。日蓮宗とも浄土宗ともいわれる僧侶だ。靈魂の不滅を主張するキリスト教に対し、その実在を妄想とする仏教が反論する

構図だが、日乗は次第に興奮する。やにわに傍らにあつた大刀を抜いて叫んだ。

「しからは、ここにゐる汝の弟子を殺してみよう。その靈魂とやらを見せてみよう」

あわてて家来に止めさせた信長は「仏僧がなすべきことは武器を取ることにあらず。根柢を擧げて教えを説くべし」と叱りつけて退出させた、という。

念仏とルターの類似に驚く

山口や京都へ旅をするうちに、ザビエルは浄土宗や真宗の人々とも接触したらしい。欧州あてに出した手紙にはこんな文章がある（平凡東洋文庫『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』第二卷）。

「この宗派を始めた人たちが何千年も大変な苦行をしたのは、多くの人たちが自分の罪のために苦しまなためです。来世で破滅に陥らなくてすむように人々に代行したのだと教えています」

「彼らの教義によると、地獄にゐる者でも、その宗派の創始者の名を称えれば地獄から救われる。だから、キリスト教のように地獄に墮ちた者には何の救いもない、というのはいけないという。彼らの宗派の方がずっと慈悲に富んでいる、ともいつている」

「創始者」とは阿弥陀仏のことであり、だれかが念仏の意味を教えたのだらう。悪人正機説を持ち出してキリスト教を批判した日本人がいたわけで、たじたじとなつた宣教師の

姿が浮かんでくる。

三十年後に来日したアレックスサンドロ・ヴァリニャーノ神父は『日本巡察記』（平凡社東洋文庫）で念仏についてさらに記録していた。「信仰のみ」を説いた宗教改革者マルティン・ルターとの類似に驚いている。こちらは、法然というよりも親鸞のことだろうか。

《阿弥陀や釈迦の名を称え、その功德を確信しさえすれば、その罪はことごとく浄められる。その他の贖罪行為などは何もする必要がない。それは阿弥陀や釈迦が行った贖罪を侮辱することになる、と説く。これはまさしくルターの説と同じである》

ちなみに、二十世紀を代表する神学者カール・バルトは一九三八年に書いた『教会教義学（神の言葉・2）』（新教出版社）で、このヴァリニャーノの驚きに触れている。そして「法然や親鸞が十二、三世紀の日本に現れたことは、まさに神の摂理によるものだ」と書いていた。

西方浄土への疑問

西方浄土の实在を信じていた人たちにとって、その西のかなたから西洋人がやってきたことは衝撃だったろう。たとえば、日本人修道士ハビアンが一六〇五年ごろに書いた「明貞問答」上巻には、こんな浄土教批判の言葉が見える。

《宣教師が乗ってきたような船で西へ西へと向かえば、元の港に戻ってきます。地球が

丸いことは明らかで、西方十萬億土とはどこを指すのか。片腹痛いことです。西方極樂世界がないならば阿彌陀仏もないわけで、浄土宗にも後生はないのです」(教文館『キリシタン教理書』所収)

『西方浄土』を文字通りに受け取るなら、この批判は当たっていただろう。浄土そのものとはともかくとして、指方立相という教義はマゼランが世界一周してからは、世間ではなかなか通用しなくなった。しかし、浄土三部經といえども古代に書かれた文書であり、地球球体説を知らなかったことは当然なのだ。釈尊を尊敬する經典編纂者たちが本当に伝えなかったことは、実は「心の中の、奥深いところ」といった、いつそう価値のある意味だったのではないか。

ドイツの神学者ルドルフ・ブルトマンは一九四一年に出版した『新約聖書と神話論』(新教出版社)で聖書理解の非神話化を提唱した。その後、日本語版が出版され、龍谷大学学長だった故・星野元豊さんは『親鸞と浄土』(三一書房)などで、浄土宗の光明寺法主だった故・藤吉慈海さんは『現代の浄土教』(大東出版社)などで、ブルトマンの方法論を浄土教も学ぶことを勧めていた。西方浄土もあくまで神話か方便として理解する方が、現代人には受け入れられる、という考えだったろう。

増上寺開山も登場

ヴァリニヤーノら宣教師たちの仏教批判は、おおよそ次のような論理だった。

① 仏教には、旧約聖書にあるような天地創造の唯一神がない。

② 釈迦牟尼仏といっても、つまるところは人間にすぎない。

③ 本来は靈魂や来世の存在を認めない教えである。

④ だから、仏教では後生は救われない。真の救いはキリスト教だけにある。

「殺仏殺祖」といった言葉もある禪宗については、おおむね当たっているだろう。当時の宣教師らは神や靈魂の実在を誇っていたのだが、この「有」に立つキリスト教の教義は十九世紀以降、進化論などの登場で大いに揺らいでいる。天地創造も天国の実在も信じられない人々が増えてしまった。かえって仏教の「無」に惹かれた欧米人が、坐禪に関心を持つようになってるのは歴史の皮肉ではないか。

ともあれ、先のキリシタンの論理にとっては、浄土教の存在がやっかいだった。浄土や阿弥陀仏の実在を説いているのだから、後生の救いがなくとも言い切りにくいのだ。しかし、ハビアンは「妙貞問答」上巻に「浄土宗之事」という一章を設けて論陣を張った。冒頭の部分を要約すると、こんな文章だ。

《浄土宗では、地獄も天国もあるようにいっている。といっても、法然門下には二派があつて、鎮西派は「当得往生」といって死後の往生を説いているものの、西山派は「即便往生」といっていま現在の名号即往生を説いている実情だ》

《浄土宗の祖師の言葉には「往生とは諸宗の悟道・得法の異名なり」とある。「悟道・得法」とは、真如のことで、神も仏も地獄も極楽もなく、ただ悟りがあることだ。つまり、浄土宗も本質は他の仏教と同じである。つまり後生はないのであつて、キリスト教には及ばないのである》

ここに登場する祖師の言葉とは、浄土宗第八祖・増上寺開山の西譽聖聰上人の「二枚起請見聞」(山喜房仏書林『浄土宗全書』第九卷所収)の冒頭に見える。ハビアンの浄土宗解釈には異論もあろうが、私にはかなり当たっているように思われる。上人はまさに先の星野・藤吉流の浄土理解だったのではないか。この「無」に立ち戻つてこそ現代に通じる素晴らしさがあると思うのだが、現在の増上寺では「異安心」となるのだろうか。

権力によるキリシタン排斥

信長はキリシタンに好意的だったのが、続く秀吉や家康は禁止・弾圧へと動いた。僧侶の多くも論争で対決するのではなく、負け犬をいじめる姿勢だった。昨春秋に亡くなった東洋思想の碩学、中村元先生が一九六八年に書いた論文「浄土教とキリスト教との出会い」(春秋社版『中村元選集・近世日本の批判的精神』所収)では、浄土宗知恩院の門跡も務めた幡随意上人白道(一五四二―一六一五)の反キリスト教活動を紹介している。

それによると、幡随意は家康にキリシタンの活動が目立っていた九州に仏法を再興する

よう頼まれた。高齡にもかかわらず引き受けた幡随意は、家康にひれ伏して陣羽織と金の軍配団扇を受け取った。現地に着いて仏法の不思議は説いたが、キリシタンの教義と正面から対決した様子がない。いささか失望した様子の中村先生はこう書いていた。

《彼の活動には宗教的動機をほとんど見ることができない。当時の仏教界で最も權威のある人物であつたが、全面的に徳川幕府に従属していた。説法の席では手に軍配団扇を持ち、陣羽織でつくつた法衣を着ていた》

さらに、中村先生は当時の仏教界の無氣力さを痛烈に批判している。厳しい文章を書かれたのは、現代の仏教界に通じるものを感じたためかもしれない。

《幡随意の活動は、どの仏教宗派とも全く無関係に行われた。ただ一人で敵の領地に入つた七十歳の幡随意の活動を、だれも助けようとしなかつた。仏教徒がみずからの理想を掲げて積極的にキリスト教と対抗しようという熱意を欠いていた。キリシタンの根絶をもたらししたのは「権力」であり「恐怖支配」であつた》

いささか、皮肉な文章を書いたところで、紙数が尽きた。読者にはお許しをいただきました。また、諸先生にはさらなる研究をお願いしたいと思います。

寺院紀行

東京・小松川

寿光院

じゅうこういん

撮影・文／真山 剛

本尊阿弥陀如来像は鎌倉時代の作



北海道新聞から琉球新聞まで、全国の地方紙そして全国紙に東京江戸川区にある浄土宗の寿光院が取り上げられた。

昨年の夏のことである。取り上げられた理由は、環境問題に取り組み市民団体が資金面で協力し合い、太陽光発電システムを発電所として稼働。電気を売っていくことで第二、第三の発電所をつくるうという市民による自発的な環境保全の社会活動が実現し、その発電システムが寿光院に設置されたからだ。

中心になった団体は「足温ネット」。自分たちの足元から地球温暖化を考えようという会員数約百名の江戸川区の市民ネットである。その足温ネットの代表、奈良由貴さんは寿光院に設置することになった経緯をこう語る。

「偶然です。でも、ご住職の大河内さんは足温ネットの運営委員ですし、もともとソーラーパネルを取り付けるお気持ちもあつたようです。これじゃあ、偶然とは言えませんか（笑）」

まさに明朗快活の言葉が似合う奈良さんは、江戸川区の区議会議員を二期務めた経歴の持ち主である。

奈良さんにはマンションの一室で話を聞いたが、その部屋の扉には小松川市民ファームの表札があり、その下に十一の市民団体が列記されている。実はこの部屋は寿光院の所有で、地元の市民団体や関係諸団体に無償でお貸ししている部屋なのである。



寿光院第十七世大河内秀人住職。東京小石川の見樹院の住職でもある



寿光院の本堂は昭和四十二年に再建され、二階が本堂で一階は客殿

市民立の発電所として寺院を提供したり、寺院所有の一室を地元
の市民団体に提供したり、またいくつもの無政府組織に属し、ボラ
ンティア活動を実践する。こうした社会との関わりを大切にされて
いるのが、寿光院大河内秀人住職である。昭和三十二年生まれのご
住職はとにかく行動派である。しかもそのフィールドは浄土宗とい
う特定宗教団体関連に限らず、一般社会のさまざまな分野に及んで
いる。初めてお会いするタイプの住職で、誠に興味深い。が、住職
の話の前にまずお寺の歴史を繙こう。

寿光院は正式名称を西方山無量教寺寿光院といい、元和三（一六
一七）年に圓蓮社鏡養輪岡上人によって開創された浄土宗寺院で、
寛文三（一六六三）年には知恩院の末寺となつてゐる。江戸に幕府
を開いた徳川家が浄土宗と縁を深めたことで、いくつもの浄土宗寺
院が建立されたが、寿光院創建もちょうどその頃である。

『江戸川市史』によれば創建は芝高輪で、第二世の時にこの小松
川の地に移転してきたとある。しかし度重なる天災で焼失、資料も
残っていないこともあり、詳細はわからない。しかし、本尊の阿弥
陀如来坐像は鎌倉末期の作といわれ、また、かつては広大な寺領が
あったことや、大田、皆川、小日向という三家が旦那としてこの寺
を支えてきたことなど、普通の寺院とは少し様子が異なりそうだが、
それ以上のことは想像するしかない。

寿光院の新会館「ナモ アミターユス」



寿光院新会館の正面



さて、この小松川の地には名産の冬菜がある。とこう書くとなぜか読者も多いだろうが、そう、小松菜はこの地の名産である。

この小松菜にはこんなエピソードが残っている。

徳川八代將軍吉宗がこの小松川に鷹狩りに来て御膳所で菜を食したところ、その美味しさに名を尋ねると、「菜っぱは菜っぱ」との答え。そこで「ならば小松菜と呼ぶがよからう」と、小松菜が誕生したという。この小松川周辺は鷹場として家康、秀忠、家光の三代の將軍がよく訪れ、また八代吉宗もよく訪れたという。だが、秋から冬にかけて行われる鷹狩りの時は農作業は一切できず、しかも使役もあり、地元の農民にとっては迷惑だったようである。

名産小松菜を生んだ小松川村は、江戸時代後期には近辺の村の中では最も大きく、東西に分かれているにもかかわらず、東小松川村、西小松川村が戸数でそれぞれ一番、二番だった。東西を分ける小松川境川の upstream には現在も東西二つの香取神社があり、今でも東西それぞれの鎮守様として祀られている。ちなみにこの小松川境川は親水公園となつて、寿光院のすぐわきを流れている。

さて、ご住職の話に移ろう。大河内住職の活動のフィールドが浄土宗関連に限らず一般社会に広がっていることは前述した。その話を聞けば、当然その理由を聞きたくなる。

「身近な人たちが抱えている問題、悩み、そこに直接そして深く

新会館道路側の壁面





講堂へ上がる階段も個性的な作りになっている



一階の客殿和室。この会館はすべてバリアフリー

一階の客殿は土足で入れるように設計されている



関わっていく。その中でこそ念仏や仏教の教えが生きてくるのではないでしようか。仏教という教えを持って社会を主体的に支えていく。これが寺院であり、僧侶だと思っています」

具体的にいえば、心の問題、少年少女のいじめの問題、高齢者の痴呆や介護の問題、地域や地球全体の環境問題などであり、また海外での孤児やエイズの問題、民族問題などである。

こうした話題は一般新聞の社会面の記事そのものである。そして実際に悩んでいる人たちの多い問題なのである。どうしてこうした視野を持ち、こうした視点を身につけられたのだろうか。

大河内住職は平成五（一九九三）年に祖父からこの寿光院を継いでいる。また父から継いだ東京小石川の傳通院の塔頭寺院（大寺院の境内に建てられた末寺）、見樹院の住職でもある。実はこうした、ある意味で僧侶離れした視野の広さを身につけた理由は、若くして住職となる経緯の中にあった。

高校時代、父が傳通院の塔頭寺院、見樹院から傳通院の住職となった。しかし種々の問題が重なり数年で住職を辞めることとなる。詳細はともかく父の退任劇の中で僧侶のいやかな面を見てしまったという。感性豊かな高校時代だけに、その記憶は尾をひく。

その後大学へ、一般大学で法律を学んだ後、仏教系の大学に編入、浄土宗の僧侶になる。当時は見樹院は浄土宗関係の役職の方に住職



正面から見る新会館のイメージはテヘットの寺院

をしてもらい、一方、寿光院は祖父が住職をしていた。

大学卒業後、浄土宗関係の職場への道もあったが、父の時の事が消えず、財団法人全国青少年教化協議会に勤務する。略称、全青協は読売新聞社主で日本テレビ放送網創業者の、故正力松太郎氏が提唱し、仏教教団六十余宗派と読売グループが協力して青少年の豊かな生活と未来のために設立された法人である。そこでの経験が大河内住職に大きな影響を与えたのである。

大学卒の新人である。まずは雑用をこなす。が、同時に日本テレビの宗教の時間、テレビ説法の企画を担当する事となる。日本テレビのプロデューサーに教えを請いながらも、どんな僧侶に何を話していただくかを考える仕事である。しかも早朝とはいえ視聴率も毎回出る。

そこで大河内住職はプロデューサーの目、つまり世間の視点を身につけることとなる。視聴者が仏教に何を求めているのか、僧侶に何を望んでいるのか。同時に数多くの僧侶に出会う中で、尊敬する僧侶もいれば、首を傾げざるを得ない僧侶にも出会い、理想の寺院像や僧侶像の基本が出来上がったという。そしてこんな先輩プロデューサーの言葉を引用してくれた。こういう言葉だ。

「坊さんでも説教師といわれる人の話はつまらないのが多い。寺の大小や位に関わらず、社会と関わりやつながりを持っている坊さ



東西の小松川を分ける小松川境川親水公園



東小松川の鎮守である香取神社。西小松川の鎮守も同じ名で香取神社

んの話の方が面白いし、役に立つ」

既にこのプロデューサーは物故したというが、この先輩をはじめ良い人たちに恵まれたという。

五年間勤務した後、退社して今度は浄土宗の青年会の活動に入る。そこでは主に救援活動に取り組み、海外へも飛び出した。現在もその活動は続けている。そうした海外での救援活動も広がり続け、その仲間が帰国した時に、先に紹介したマンションに寝泊まりすることも少なくないという。

何事も実際に行動する姿勢、寺院施設をオープンにする姿勢、大河内住職流の寺院や僧侶の姿がそこにはある。

さて、そうした大河内住職が長年の思いを形にしたのが、市民立江戸川第一発電所ともなった新築の客殿、会館である。十六年前、結婚と同時に小石川の見樹院からこちらの寿光院に住まいを移して以来、温めてきた構想である。

新会館の写真を見て、これがお寺の建物、と驚いた方も少なくないだろう。このチベットの寺院を模した建物は昨年完成した。

しかしこの建物は住職にとって二番目の目標だったのである。

大河内住職が継いだ時は檀家数が数十、飛び地ながらの土地はあるものの、先代である祖父は役人で転勤ばかりだった。祖母も働いていた。葬儀や法事は両隣の浄土宗寺院にお願いするのが常だった

入り口にはエネルギーの大切さを伝えるパネルが並ぶ



新会館屋上に備えつけられた太陽光発電システム



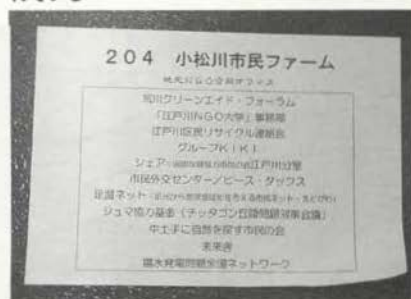
という。檀家さんとしては良い寺ではなかったという。そうした中で地元の人たちの悩みや問題を寺を通して共有しているこうと考えたという。悩みの一つは子供の教育問題。全青協に勤務して実態も見ていた。もう一つは老人の問題。高齢化社会に痴呆や介護は避けられない。このどちらかに取組みたい。しかし両隣の寺院が保育園と幼稚園をやっている。それならと特別養護老人ホームとしての活用を考えた。役所との交渉も詰め、後は檀信徒に諮るだけとなった。が、そこでこの案は否決される。賛成してくれる檀信徒も多かったが、お寺としての姿にこだわる人もいたからだ。

そこで老人ホームとはいかないまでも、グループホームとして使える設計にしたのである。

「この建物は敗者復活戦ですよ」とご住職はおっしゃった。しかし、そう思えないのは、できる範囲で、みんなから許される範囲でやることのほうが、仏教思想にかなっていると思うからだ、いかなだろう。まして、冒頭の発電所といった形で市民運動の一環に大きな役割を果たしている。また、マンションの一室に机ひとつ置かしてもらっている地元の市民団体の方からみれば、どれだけ有り難いことだろうか。社会に密着して社会の問題に立ち向かう姿は頼もしい限りである。寿光院がこうした伝統をいつまでも残していけるよう、ますますの期待を寄せたい。

(ルポライター)

寿光院所有のマンションの一室は
地元小松川の様々な団体に提供さ
れている



足湯ネット代表の奈良由貴さん。江戸川区の前区議会議員でもあり、現在は江戸川生活者ネットワークの事務局を務めている



懐しき玩具

撮影

芝崎慶三

重ねられた積み木を水平に打ち抜くと、積み木だけが飛んでいき、上の達磨さんは下へストンと落ちる。「だるまおとし」という遊び。玩具としての起源はあまり明らかではないが、群馬県前橋の総社町を中心として製作されている「総社の挽き物玩具」いわゆる上州木地師の流れのひとつとして郷土玩具辞典等には記載されている。「だるまおとし」の名はむしろ玩具の名であるよりも力学実験のテーマ名として定着していて「慣性の法則」を理解させるときに教材として用いられ、静止しているものが静止を続けることを示す。

達磨落としのその下に力学台車を置き走らせながら打ち抜くと、運動しているものはその速度を保つことを示す、ということになる。

「書きおろし連載小説」

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々

式子内親王の生涯（第二部）

第五回 残された人々

十二

「おお、廊^{ろう}の御方でありますな。成人するまでは、六波羅の屋敷でともに育った妹でございますぞ」

「されば――」

何か親しい身内に対するような、なつかしいともいえる心がふいに湧きあがってくるのを、強いて押さえた義経はきびしい表情でそういったまま黙した。

ふしぎな糸でむすばれ、そして今、合戦の勝者と敗者にわかれて相對している運命の重さとふしぎさが、ひしひしと二人の心をおそっていた。

と、やがてそのはりつめた沈黙をやぶって重衡が、

「――こうして捕われの身にならずしては、九郎殿に相い会うことのできぬ定めを、口惜しう思います」

「いかにも」

義経はそつけないとさえ思える声で、答えた。

廊の御方をあいだにおいてみると、二人はいわば義理の兄弟である。

だが今、そんな感傷にひたっていることは、義経にも重衡にもゆるされることではない。義経は早く話題をかえて、別の方向にもっていきかけた。そこで彼は、

「ところで」

と一つ大きな咳ばらいをして、

「近く三位殿には鎌倉に下っていたただかねばなりませぬ」

といった。

「兄頼朝が、三位殿との対面を望んでおります。鎌倉に下られれば、都にいつ戻れるとも予測がつきませぬ。兄の心一つにかかっておりますれば」

重衡の頬からさつと血の気が失せた。義経のことばは、鎌倉で重衡が処刑されることを、

暗に語っているに違いないのだ。

重衡は剛にして優、優にして剛、と謳われた一門のホープである。

だが、合戦場の昂揚した気分がなかならともかく、捕らわれの身となつて都に送り返され、われ一人、もののしく武装した源氏の侍たちの監視のなかに置かれてみると、日がたつにつれ、重衡の心のなかには死への恐怖がうまれてきていた。

「人間の本能」

といつてよい。重衡は「鎌倉に下つてもらふ」という義経のことばに、一瞬、たじろぐかにみえた。

だが、彼はすぐ己れをとり戻すと、

「もとより、死は覚悟のこと。鎌倉に下り、われらの存念ぞんねんをお話し申そう」ときつぱりと答えた。

しかし、義経はそんな重衡を無視するよう

に、
「鎌倉に下られれば、当分、都の風にあたる

ことはかないますまい。されば、都で逢うておきたい、たとえば」

沈丁の花であろうか、どこからともなく花の香りがただよつてきた。

十四

頬には感じないが、板戸のすきまから風が入つてきたのであろう。燭台の灯がかすかにまたたいている。

義経はその灯のほうにしばし視線を送つていたが、ふたたび重衡にまなざしを向けなおすと、

「たとえば、女性にょしづはおりませぬか」

と問いかけた。

「……」

「都の花とうたわれた平家の方々かたがたなれば、親しき公家くけたちも多くおりましよう。なれど、今の御一門に公家衆との対面はゆるされませぬ。しかし、女性にょしづは別でござる。女性ならば

ゆるされましようぞ」

「……」

「どなたかおわさぬか。合戦と男女の仲とは別でござる」

父義朝の仇敵ではないか。情けは無用、と思う気持の底から、今、目の前にいる重衡を惜しむ心が、このとき、義経をうごかしていた。

重衡が察して一瞬たじろいだように、鎌倉に下れば、まず確実に、彼は二度と都の土をふめぬであろう。黙したままの重衡にむかつて、義経はかさねて声をかけた。

「都に残していかれた女性もござろう。その女性に逢うてから鎌倉に下られよ。この九郎、仲立ちをいたしましうぞ」

「お氣持、まことに忝けないが」

再三にわたる義経のことばに、重衡のおもい口がやつとひらいて、

「都には、たしかに今一度逢うておきたい女房もおります。しかし」

重衡の目に、義経への深い嘆願のいろがこもった。

「しかし、それよりも、私には今、九郎殿にお願いしたきことがござる」

「おお、それはいかようなことか」

思わず、義経は声を大きくして訊ねた。

「されば」

重衡は、はたと義経をみつめて、

「鎌倉に下るまえに、出家いたしたい。この儀、おきき入れただけまいか」

「——その儀は」

はつとして義経はいい淀んだ。

「その儀ばかりは、九郎の一存でとり計らうことはできません」

「お願いしたきことは、この一事につきるのだが」

「なれど、御一門は今、朝敵の御身。出家には院の御許しが必要です」

「院に奏上してはいただけまいか」

「お望みとあれば、お取りつぎはいたしまし

よう。されど——」

何、重衡の奴めが出家したいとな。ならぬ、ならぬ。南都を焼打ちした重罪人ではないか。きやつが出家して極楽往生など、み仏もゆるされまいぞ。

義経には、木曾義仲を追討して入京したその日から今日までのあいだ、何度か拝謁してきた後白河法皇の、はげしい怒りの声がきこえるようであつた。

朝敵に加えて、重衡は今、南都を焼亡させた悪人として、都はもとより、津々浦々しらぬ者としてない、

仏敵

になつてゐるのだ。

十五

合戦場では決断の人である義経がいい淀んでいるのをみて重衡は、

「かく捕らわれた上は、死はもとより免れま

せぬ。しかし、その前に懺悔し、かなうことならば出家した上で、死にたいのです。恥かしきことながら、私は今、南都を焼打ちした罪におののいております」といった。

治承四（一一八〇）年の暮である。

その年七月に頼朝が伊豆で挙兵して以来、各地で源平の小ぜりあいがつづくなか、清盛は都にちかい反平家勢力の一大拠点南都を、征討しようと決意したのである。

このとき、総大将に命じられたのが重衡であつた。

重衡は一門の通盛を副将に、四万余騎をひきいて南都にむかったが、武装した七千余の南都の僧兵との戦いは、夜にまでもちこされた。

ときは十二月二十八日。あたりは漆黒の闇である。

そこで、般若寺の門前に立った重衡は、部下に、

「こう暗くて同士討ちにでもなったらことだ。火を出せ」

と命じた。

「おおーッ」

あたり一面、漆黒の闇につつまれているなかで、即座に声をあげた者がいた。明石の莊しやう司友方しどうかたである。

と、この声をあいずに、重衡配下の侍たちはつぎつぎに松明をつけては、付近の民家に放っていった。

ところで、南都はその夜、冬の木枯らしがふきすさんでいたのである。

民家に放たれた火は風にあおられ、またたくうちに東大寺をはじめ多くの寺院をなめつくしていった。

東大寺大仏殿の二階には、千余人もの人々が逃げ込んでいたろうか。

だが、火はまさしくその二階にも押しよせたのだった。

焼け焦げていく千余人の人々の、おめき叫

ぶ声。

「焦熱、大焦熱。無間、阿鼻あびの焰の底の罪人のおめきも、とてもこれにはかなうまいとみえた」

南都焼打ちの一シーンを、平家物語はこう記している。
(つづく)

石丸晶子(いしまるあきこ)

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究所修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝』面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』(人文書院)『お手紙から見る法然さま』(浄土宗出版室)『現代語訳蜻蛉日記』(朝日新聞社)など多数。

弥陀の本願を決定成就して、極樂世界を莊嚴したてて、御目を見まわして、わが名をとらふる人やあると御覧じ、御耳をかたぶけて、わが名を称する者やあると、夜昼聞こしめさるるなり。されば一称も一念も阿弥陀仏に知られまいらせずといふ事なし。されば摂取の光明はわが身を捨て給ふ事なく、臨終の来迎はむなしき事なきなり。

『或人に示す詞』

阿弥陀さまはその本願のお誓いを成就し、極樂世界をつくりあげられました。そして、その御目を見まわして、我が名を称える者はいないだろうか、御覧になり、御耳をかたむけて、我が名を呼ぶ者はいないだろうか、昼も夜もお聞きになられているのです。それ故、たつたひと声のお念仏であっても、阿弥陀さまがお氣づきくだされないことありません。

二つの浄土　　く法然上人と親鸞聖人く

とあるシンポジウムで、ある僧侶が「小さなお子さまを亡くされたお母さまにどんな言葉でおなぐさめすればよろしいでしょうか」と質問されました。何人かのパネラーの中のお一人、浄土真宗の碩学の先生は「お母さまが救われなければお子さまが救われることはないんですよ」とお答えになりました。それに続く応答はありませんでしたが、私は不満ばかりがつのりました。なるほどこうした解答は妙に聴衆を納得させてしまいます。頭でっかちになってしまった私たちの持つ知的欲求には実にうってつけな言い回しだからです。

けれども、はたしてそのお母さまは、そして何よりそのお子さまはそれで本当に救われてゆくのでしょうか。私には、そうした言い回しは「綺麗事」きれいごと「机上の空論」に映ってしまいます。なぜなら、もし私が小さなわが子を亡くしたならば、人前では「もう大丈夫!」と強く振る舞えたとしても、一人つきりになったらいつまでたつても寂しくて、つらくて、悲しくていられないだろうからです。

浄土真宗の開祖・親鸞聖人は、こんな言葉を残されています。

無上佛と申すは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬ
ゆゑに、自然とは申すなり。
〔正像末和讃〕

「真のみ仏には『かたち』などないんだよ。ありのままの『自然』
なんだよ」と教えています。こんな言葉もあります。

法身はいろもなし、かたちもましまさず、しかればこころもお
よばず、ことばもたえたり。
〔唯信鈔文意〕

「真のみ仏には私たちの『こころ』や『ことば』など及ばないんだ
よ」と。

「法然上人が教えて下さった阿弥陀さまやお浄土はいったいどう
いうものなんだろう?」。これまで学ばれた仏教学の常識の中で親
鸞聖人が辿り着いたのがこうした「こころ」や「ことば」の及ばな
いみ仏でした。親鸞聖人の教えを真摯に学ばれた浄土真宗の碩学の
先生が先に示した解答をされたのも至極当然の結果なのです。ある
先生は「今私が『私』と言っているような私が、私でなくなった時」

が親鸞聖人にとつての浄土であるとおっしゃっています。

私は他ならぬ法然上人の教えをいただくことができて本当によかったと心の底から感謝しています。「いつまでたっても悲しいだろう」という私たちの心のありのままの姿を法然上人はお察しになり、そんな私たちを救おうという阿弥陀さまとお釈迦さまの聖意をお汲み取り下さったからです。そして、冒頭のご法語のように「御目を見まわし」「御耳をかたぶけて」私たちのことを探して下さる阿弥陀さまこそ真のみ仏であり、私たちの「心」を通わせることのできる「莊嚴」な場こそ真のお浄土であると教えて下さったからです。

「大丈夫ですよ、お母さん。必ず阿弥陀さまがお子さまを迎えに来てお浄土にお連れして下さいますよ。ですから、先にお浄土に旅立たれたお子さまを悲しませないように、寂しいけれど、つらいけれど、悲しいけれどしっかりと生きてまいりましょう。そして、一緒に一念仏を称えてお子さまの待つお浄土に必ず往生させていただきますよ」。冒頭の質問に私だったらこう答えます。

合掌

(大正大学講師・林田 康順)

連載

雑誌『浄土』を支えた人々

列伝

仏教ルネッサンス再び。珠玉の一冊『念佛読本』執筆者たちの足跡

解行双修の念仏者

石井教道先生

大橋俊雄

●石井教道先生



かつての尾張は仏国・真宗王国と言われ、「二人出家すれば八族天に生まる」と言い、^{びさい}尾西の農家で僧尼の一人、二人を出している家は珍しくなかった。尾西だけでなく三河から尾張・北近江、それに続く北陸地方は信仰心の篤い家が多かった。その伝統は多少の変化はあっても、今に受け継がれている。

石井教道先生も、そうした社会と生活環境

の中で幼少時を過ごし、念仏者となり仏教学者として大成した。先生には華嚴学者・宗乗学者という研究者としての面と、念仏者の二面があつた。華嚴学は学位論文『華嚴学成立考』（のち『華嚴学成立史』として発刊）として実を結び、浄土宗学は『浄土の教義と其教団』『法然上人の日本的宗教』『選択集の研究』（大綱編・註疏編・講述編）として結実した。

先生は尾西、愛知県葉栗郡大田島村（現・一宮市）に明治十九（一八八六）年生まれたが、兄弟六人のうち長兄龍善、末弟俊瑞が出家し、姉は京都招善寺秦隆典のもとに嫁し、父の弟俊龍も僧となった。石井家は先祖が屋敷地をさき小松寺（西山浄土宗）を建て護持していたというほど、先祖以来信仰心の篤い家であつた。

叔父俊龍につれられて入洛した先生は、俊

●石井教道先生

龍の住寺永養寺に落ち着いたが、のち裏寺町うらみまち称名寺しょうめいじの宇都宮善道のもとで得度した。永養寺にしても称名寺にしても、所作法式しやくしふしは鹿ヶ谷流できびしく、「一掃除、二勤行、三学問」どころか、「一掃除、二掃除」の連続であった。そうしたなかで浄土宗学第五教校（現・東山高校）に学び、さらに宗教大学専修部分校に進んだが、教校卒業時賞品として手にした『華嚴金獅子章』が終生華嚴学を専門とする端緒となり、分校卒業後上京して宗教大学研究科に入り、河野法雲こうのほううんに師事して華嚴学を深めた。卒業後大正五（一九一六）年四月大野法道先生のあとをうけ叡山大学講授に就任。以来十二年四月大正大学に転任するまで七年間、安土浄厳院あずみじょうごんに隠棲していた大鹿愍成おおしかみんじやう勧学の指導を受けながら、唯識学と華嚴学を隔年に講じた。

先生が念仏者として安心立命を得たのは、

明治三十六年七月教校を卒業後、三年ほど大病を患い、将来の望みを捨てなければと覚悟したときのこと、そのとき大声に一心に念仏して一命をとりとめ、阿弥陀仏の慈光に接して安心立命した。そのとき医師安村千代蔵の手厚い看護もあつたが、以来ひたすら念仏にはげみ、健康もめきめき快方に向かった。先生はよく念仏しておられ。長身瘦軀みうく、羅漢さんのようなお顔で、仏前に坐したとき木魚のバイを手になきな声で口早に念仏をと覚えておられた。

大病を機に信仰を求めておられた先生と安村医師は安心について真剣に話し合われた。二人は安心についての受け取り方が違っていた。このとき先生は浄土宗の安心を説き念仏を勧めた。医師は浄土真宗の信者であった。それから三十年後の昭和十二（一九三七）年十一月、突然上野凌雲院じやううんに仮寓していた先生

のもとを訪ねた安村医師は会うやいなや合掌し十念して再会の喜びを分かち合い、その後の安心の趣きを問うた。先生は変わらない旨を話すと、医師は「わしは変わった、念仏は大声で称えなければならぬ。相続すべきである」と言い、話の合間合間にも念仏を称えていたという。

先生は宗教大学分校を卒業するころ、京都大学で哲学を学びたいと考えていたことがあっただけに、好んで哲学書を読み、出版され

ばかりの、田辺元の『懺悔道の哲学』や鈴木大拙の『浄土教思想論』を丹念に読むなど、新しいことにも常に目を向けておられた。

その反面、どうしたら浄土の教えをやさしく説き、人びとに納得させてもらえるかにも苦心されていた。言わば先生は解（学問）行（念仏）双修の念仏者として生涯を送り、昭和三十三年八月、世寿七十六歳で世を去られた。

（本山蓮華寺・文学博士）

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

執筆一覽

念仏讀本

石眞大佐中椎
井野野藤村尾
教正法賢辨辨
道順道順康国

稲小佐江島笹
垣西藤藤野本
眞存春滋植成
我祐夫英祥浄

中松梅矢井
野浦原吹川
（目次登場順）
善眞慶定
英一隆輝慶

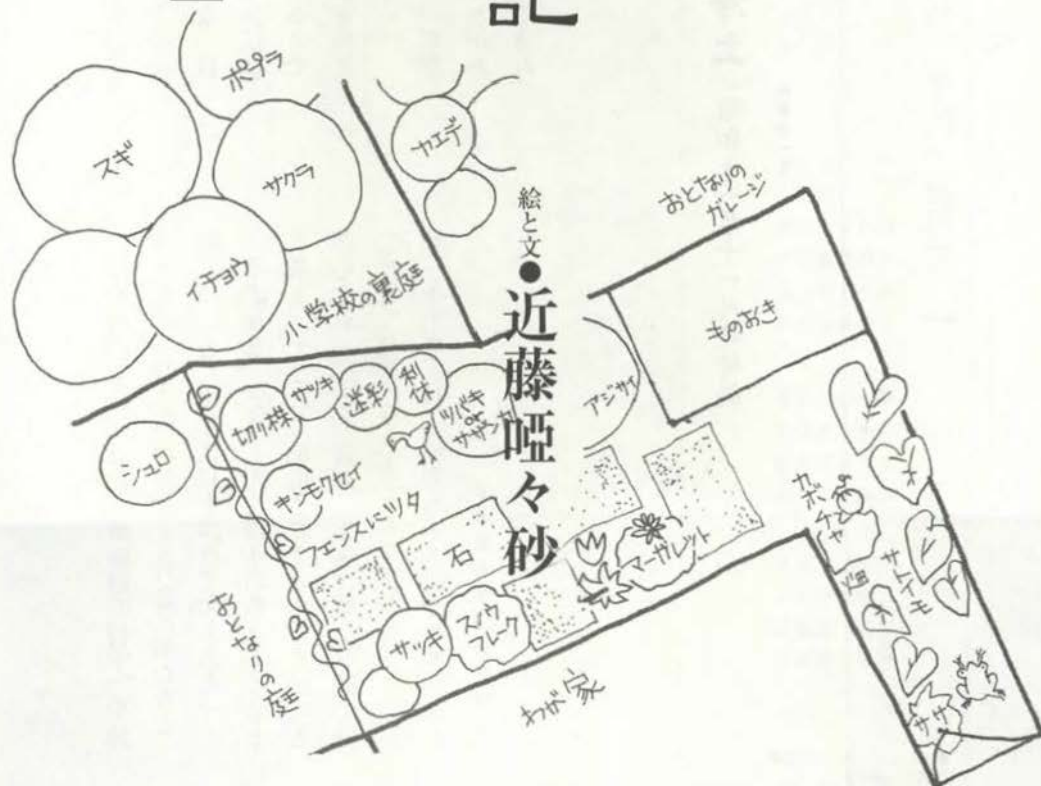
念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■
法然上人顕仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
電話：03-3578-8947/FAX：03-3578-7036

つぼ庭日記

【にわか農民の夏】



団地サイズの鯉のぼりが、青くさい風をはらんでたなびいている。その下で保育園をズル休みした息子が、ウルトラマンの変身アイテムを身につけて遊び、カメラを向けるとスベシウム光線のポーズをした。

その横で羽虫は用ありげに飛びかい、モンシロチョウもマーガレットを目当てにせわしなく行き来している。小鳥はさえずり、ポブラやイチヨウの木の下で野外授業の子らが、ブロック塀のすぐ裏で何かの観察をしたり、腐葉土を集めたりしているのが、ガヤガヤと聞こえてくる。

細長いサヤをつけ、立ち枯れたムラサキケマンを抜こうと触れたとたん、無数の小さな種がパチンとはぜた。サツキの花も終わり、油粕と骨粉を少々、根元の周辺に埋め、「ありがとう。来年もよろしく。」とお礼肥をした。今日こそは鯉のぼりをしまおう。

それから、畑のサトイモにも追肥をした。入門書によれば「サトイモは、植え付けのと

きタネイモの下に元肥をし、発芽したら三週間以降、本葉が二〜三の頃に一回、さらにその一ヶ月後の梅雨明け前にもう一回、追肥と、子イモが芽を出さぬよう根元に三〜五センチほど土寄せをせよ」と書いてある。待ちに待った第一回目の追肥だ。カレースプーンほどの小さな葉をつけた赤ちゃんサトイモの株のまわりの土を手で優しく中耕し、土寄せをし、肥料をまいた。

そのすぐ後のこと、畑に埋めたナマゴミの中から、カボチャが芽をふいた。カボチャは成長が早く、あれよあれよと葉数を増やし大葉になった。あわてて入門書のカボチャのページをめくると、「人工受粉が必要」とある。またひとつ楽しみがふえた

そして、くすぐったい春は暮れ、五月闇に夏が匂うようになった。おくての恋猫が鳴きながら、すごい勢いで走ってゆく。アジサイのつぼみはほんのりと色づき、葉裏ではカタツムリがじっと雨を待っている。カナメモチ

の苗木にアゲハチョウの幼虫をみつけた。五匹の幼虫がビロードのような緑色の体をくねらせて、葉っぱをムシヤクシヤ食べている。兄弟なのか、五匹ともそっくり同じ大きさだった。苗木は食べつくされ、葉脈だけになったが、よく見ると何枚が残った葉っぱの裏に糸をはって、いつの間にかサナギになっていた。

梅雨に入った。もう太陽が雲を押して空を明るくしているのに、雨はしぶとく降り続く。それでも畑を始めてからは、雨がイヤでなくなった。アジサイは次々と花を咲かせ、庭木も喜んでいるように見える。傘をさして息子と畑に出てみると、サトイモがひざの高さまで丈を伸ばし、手のひらほどのおおきさになった葉がバラバラと雨の玉をはじいている。息子が「わあーきれい。キャッキャッ」とやや芝居じみた仕草でイモの葉に触れると、雨の玉はコロコロと光りながら落ちていった。カボチャは黄色い雄花を咲かせ、つぼみをい



カボチャの雄花

つばいつけている。私は雌花を待っていた。

それから三週間の七夕さまの朝、ようやくとひとつ雌花が咲いた。ガクの下にピンポン玉くらいの丸い玉をつけているのが特徴だ。入門書通り、雄花のシベを雌花のシベにつけ受粉させた。

花が終わるとその玉は大きくなり、色も形もカボチャになった。竹の皮をザブトンにしてカボチャを地面に座らせる。立ち上がると大きなアゲハチョウが頭をかすめて飛んでいった。

そして、梅雨の終わりに頃は、四歳児の背

丈ほどになり、葉も七面鳥の丸焼きの皿になるくらい大きくなった。晴れた日に畑に出ると草いきれがして、足もとをビヨンピヨン、バッタやコオロギの小さいのが飛びはねた。

ある雨上がりの午後、二階で息子と積み木をつんでいるといきなりみーんと初蟬が鳴いた。すぐ目の前のイチヨウの木に止まっていたのか、近すぎて部屋が蟬の声でいっぱいになった。「カンちゃん、蟬だ。蟬が鳴いたヨ。今年初めての蟬!!」と感動して言うのと、息子はゴロリと畳に横になり、一言「止めてきて」と言った。

一編集者の小さな回想 風貌 河辺岸三

4月15日刊

四六判 102頁 1300円＋税

仕事や運動をとおして交流を得た、今は亡き思い出深い人びと(河野興一、桑原武夫、丸山眞男、北添忠雄、久野収、前田俊彦、秋山清、横田端穂)の断面をエピソードを織りまぜながら抑揚ある筆致で描く。時代を画したこれらの人物像によって、失われつつある時代精神をも甦らせる。

統一 よむ映画

鈴木陽子

1300円＋税

三十八本の映画作品をとおして見えてくる女と男の在りようを、好評を博した前著に続いて論じた本書は、作品批評を突きぬけた、新しい映画批評のジャンルを提起する。

西田書店

千代田区神田神保町2-34山本ビル
Tel 03-3261-4509 Fax 03-3262-4643

新しい法然像が
みえてくる

法然讃歌

著 寺内大吉

中公新書 740 円十税



問 酒飲むは罪にて候か
答 まことには飲むべくもなけれど、この世のならい

「法然さまのこの問答は知っているだろ」

「はい」

「この世のならいって、何だと思う」

「えっ」

「これはね、法然さまがおれたちに問いかけているんだよ。『この世のならいだけど、おまえはどうする』ってね。法然さまのお言葉には、この問いかけが多いんだよ。『それで、おまえさんは、どう思うんだい』って」

『法然讃歌』の序を見て、数年前、宗教総長であった寺内師に同行したときの会話を思い出した。

この“問いかけ”に対する答え

を考え始めたことが、この『法然讃歌』につながったのであろう。そう思いながら読むと、これまでに著されてきた法然上人ものとは違う、新鮮な「人間法然」上人像が現れてくる。

特に第四章「ひじりの群れ」では「浄土の法門と遊蓮房にあえることこそ、人界に生を受けたる思いにしして侍れけれ」と法然上人の関係などは、師の歴史考察の深さを感じずにはいられない。

法蔵菩薩の四十八願中の第十八念仏往生の願にちなんでか、この著は十八章からなっているが、それぞれの章で師の新しい法然上人観が感じられてくる。そしてまた、今を生きる私たちへのメッセージも見えてくる。

往生とは何か 珠玉の一冊

往生

著 眞野龍海

国書刊行会 1500円十税



著書を手にする眞野先生。
二河白道をイメージさせる表紙。

二河白道を渡るのは亡者ではなく、往生行を踏みしめていく、生きていく往生を目指す、今を生きた往生人である。その白道が尽きた最後のゴールインが往生である。しかし、その進みつつある白道は往生への助走路である。全体の行方は往生の行であり、五種正行である。

と、著者は書く、「往生」についてどう説明するか、とても難しい問題である。わかりやすく、そして正確に。

たとえば著者は「往生」について思うところを英語圏の人に説明し一度英訳を試る。そしてそれをもう一度日本語に訳してみる。すると問題が解けてくる。わかりやすいとは何か。正確とは何か。むしろ考える以前のおおもに

立ちかえることになる。

わかりやすく、しかし正確に、ということに腐心する著者の態度は明晰である。そして真摯である。

世俗的に使用される「往生」という言葉の意味内容にまで言及し本来的な「往生」を説かねばならぬモティベーションを語るとき、著者は生き生きとした人間精神、仏教者の心を具現する。

さまざまな場所に書いたものを集成していることが、かえってひとつの真理にむかう糸口になる。

どこから読んでもいいし、どこでとめてもいい。柔かな眼差し。

優しい目配り。撥刺とした魂の躍動を感じることができる。

この一冊を読むと著者の幅広い教養や日常の生き方に大きく包まれる。名著である。

浄土宗と浄土真宗の違い

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

限
有
会
社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)38421289

振替00180245231

ご本尊は当然とこちらの宗派も
阿弥陀如来(仏)であることは
御存じのことと思います。

しかし二つの宗派では、決ま
っていることではないようです
が、ほとんど決まっているかの
ように、阿弥陀さまの光背の形
が違っています。

浄土宗では大半のお寺、また
檀家さんに指導するときにも、
舟形光背の阿弥陀さまといいま
す。それに対し浄土真宗では、
お東(大谷派)では筋後光の阿
弥陀さまとし、お西(本願寺派)

では舟形光背と筋後光を合わせ
たお姿の阿弥陀さまとしている
ようです。

また阿弥陀さまが立っている
お姿と座っているお姿のもので
は、浄土宗ではどちらのお姿も
ございますが、浄土真宗では立
っているお姿のみをおまつりす
るようです。

座っているのは極楽でお待ち
になっているお姿。立っている
のは、ご自分から我々をお迎え
に来るお姿といわれています。

舟形光背は、阿弥陀如来の大

その2 ご本尊

慈悲が誰れ彼れと区別、差別を
することなく、万人を救い取り
お浄土にお迎えするお心の広さ
を表しているのに対し、筋後光
はその慈悲の光があらゆる世界
を照らし、すべての人々に今現
在注がれていることを表してい
るようです。

つまり、西方極楽浄土への往
生に主眼をおく浄土宗に対し、
浄土真宗では、現在の阿弥陀如
来の救いを強調する姿勢が現れ
ているように感じられます。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

特選作品展

(1998年10月～2000年4月／増田河郎子選より)

百歳の指のささくれ鶏頭花

井村善也

98・10 自由題

叔父たちの儲け話や墓参

秋谷菊野

98・10 墓参り

切りそろう臨月の爪稲光

井口 栞

98・10 稲光

里帰り毛布は母の匂いして

島神涼子

98・12 自由題

老犬のわずらうまなこ枇杷の花

植田規夫

98・12 枇杷の花

東京枯野熱き紅茶をいれている

井口吾郎

98・12 枯野

釣り人に冬至粥炊く岬茶屋

冬木立真向かう妻の試歩の杖

亡き母の好きな塩鮭手でほぐす

一湾を大きく抱きて青岬

病室のラジオの中の去年今年

寒紅を一途にひきて歳かさね

卒業生窓の内外磨き合ふ

いのちひとつ芽生えし便り春隣

仏の座対岸の尾根鮮やかに

板東太郎渡りてふぐりおとしかな

余寒なほ声落としゆく夕鴉

座布団を干して子等待つ彼岸前

北川弘子

99・1 自由題

上野卓誠

99・1 冬木立

柴崎亮一

99・1 塩鮭

細田初枝

99・2 自由題

矢野玉枝

99・2 去年今年

大場 清

99・2 寒紅

北川弘子

99・3 自由題

山本美代子

99・3 春隣

池田伊吹

99・3 仏の座

佐藤雅子

99・4 自由題

小林恵美

99・4 余寒

藺田郁子

99・4 彼岸前

入彼岸仏のいます数珠の穴

蝶の舞ふ病院の庭シート干す

雑踏に母のそら似や風光る

汐干果つ船の汽笛を合図とし

窓開き額縁ほどの花見かな

風船の影丸くゆく石の街

土産売る婆の居眠り春浅し

若葉風寺領三万坪匂ふ

柏餅いっこく者の叔父来る日

紫陽花や陣取りごっこまた明日

朝顔に海描きたしてゐる児かな

夕立のくるらしき風たちはじむ

関口光樵

99・5 自由題

千崎千春

99・5 蝶

横田麻衣

99・5 風光る

島谷ときを

99・6 自由題

河合富美枝

99・6 花見

蠟山吉宣

99・6 風船

小久保あきを

99・78 自由題

細田初枝

99・78 若葉風

道山幸次郎

99・78 柏餅

別役玲子

99・9 自由題

池田伊吹

99・9 朝顔

山本美代子

99・9 夕立

駅売りの傘ばかり増え夏おはる

海山の木霊ひきよせ施餓鬼寺

一房の意外に重し葡萄摘む

秋刀魚焼く七輪ぼつり夕景色

子の歯型夫の歯型りんご紉く

島にまた空屋がひとつ虫しぐれ

庭下駄の鼻緒のしめり虫の闇

僧衣めく寺院の隅の破芭蕉

ゆずみその器の柚子の少しこげ

里神樂おかめの面ののど仏

短日やきみの手帖にしるし打つ

大根稲架組んで風呼ぶ伊勢平野

斎藤亮吉

99・10 自由題

河合富美枝

99・10 施餓鬼

堤ふみ子

99・10 葡萄

四本章江

99・11 自由題

石原 新

99・11 林檎

浜田佳春

99・11 虫

蘭田郁子

99・12 自由題

金谷友江

99・12 破芭蕉

山崎遣迎子

99・12 柚味噌

小久保すゝな

20・1 自由題

神田弓絵

20・1 短日

島谷ときを

20・1 大根

軽々と島を浮かべて冬の池

雪我狂流 20・23 自由題

書き終えて輪ゴムぱちりと賀状かな

根岸 哲 20・23 賀状

福寿草盆栽ならび築五年

近藤魚夢 20・23 福寿草

春の水湧く滾々という無音

森中由香里 20・4 自由題

塀ごしに伸びし伽羅の木月朧

金谷友江 20・4 朧

校庭であぶる目刺しや宿直日

古井戸白々 20・4 目刺し

浄土誌上句会のお知らせ

締切・五月二十日
発表・『浄土』七月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

季題 祭心太

● いずれの題とも数の制限はありません。
● 特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

自由題

宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

おことわり

4月号告知の次回誌上句会（季題Ⅱ
虹・トマト）は6月号発表とお知らせいたしましたため今月の題詠はお
休みさせていただきます。

マンガで楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

有頂天

「彼はいま、うちようてんさ」
 などと使う有頂天は仏教の宇宙
 観がもとの言葉。天上界を欲界、
 色界、無色界の三界二十七天に
 分けるが、その色界の最高を色
 究竟天といい、ここを有(物質)
 の頂にある天、有頂天とする。
 つまり幸福や得意の頂点にあ
 る状態のこと。一説に天の最も
 高い所を九天として、そこから
 転落することを「九天直下」と
 もいう。一般的には「急転直下」
 だが、今回の漫画ではこの「九
 天」を使ってみた。念のため。



編集後記

さまざまに形をかえて初芽ふく 岱潤

今年出版された永六輔さんの『親子』という本をめぐっていて、とても興味を引くアンケートの結果が載っていました。それは子供にとって親に一番言ってほしくない言葉を三つあげて下さいというアンケートでした。そして同時にお母さんたちを集めて、子供があげる三つとは何だと思えますかというものでした。結果としておもしろいのはこの三つがみごとに違っているのです。

- まずお母さんがあげた三つとは、
- ① 静かにしなさい。
 - ② 勉強しなさい。
 - ③ お手伝いをしなさい。

です。残念ながらこの三つは子供の解答の、ベスト三十にも入っていないかったそうです。お母さんたちがいつも言っているこれらの言葉は、子供たちにとっては、意識の中にも残らないただの雑音だったのです。

- それでは子供たちがあげた三つは、
- ① どうせあんたはそんな子よ。
 - ② あんたなんかうちの子じゃない。
 - ③ あの子と付き合うのはやめてです。

今、子供たちに一番好きな『詩』は何ですかと聞くと、金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」をあげる子が多いそうです。この詩の最後の言葉「みんなちがって みんないい」に子供たちは唯一救われているのです。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

佐山哲郎

岡川彰道

編集顧問

大室了暗

浄土

六十六巻 五月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十二年四月二十日
発行 平成十二年五月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シーディーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八 六九四七

FAX 〇三三・五七八 七〇三六
振替 〇〇一八・八・八二八七



道路工事中



消火器



歩行者通行禁止



火気厳禁



注意



駐車禁止



静寂地



濡れた路面注意



低空飛行



出口



落下物

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



fragile



安全第一



歩行者注意



fragile

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人顕仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠



水晶腕念珠

水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

水晶数珠 ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

ブレスレット ④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円

⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えます。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。



水晶数珠ブレスレット



仏壇用宗旨布教額

家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

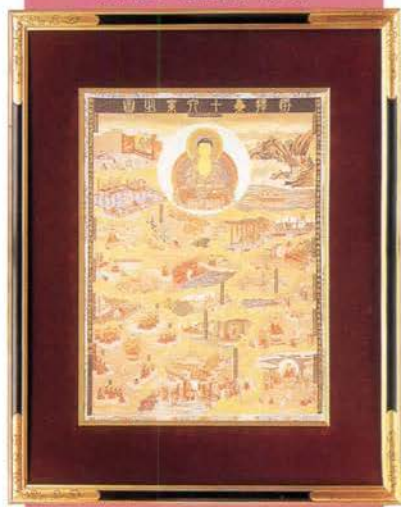
小(273×142ミリ)

480円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間がかかります)



平成11年6月より頒布価格が変わりました